

<b>1 学校教育目標</b> かしこく・やさしく・たくましく・ふるさとを愛する児童の育成	<b>2 本年度の重点目標</b> ○ 質の高い教育活動の推進 ・学び合い高め合う教師集団「チーム北方小」の育成 ・学力向上のための取組の推進 ○ 地域と共に伸び行く学校づくりの推進 ・北方町が大好きな子どもの育成 ・幼保小・小中連携 ・地域との連携
--	--

達成度 A: ほぼ達成できた  
 B: 概ね達成できた  
 C: やや不十分である  
 D: 不十分である

**3 目標・評価**

**① 質の高い教育活動の推進**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○業務効率化の推進	・時間外業務を20%削減する。	・前年踏襲ではなく、学校及び児童の現状に対応するための取組へシフトする工夫を行う。 ・校務支援システムや校務サーバーを活用し業務データの共有化をさらに進め効率的な業務遂行に当たる。 ・前任者との情報共有及び連携を密にすることにより作業効率を高める。 ・業務内容に軽重を付けるとともに、優先順位を明確にした業務遂行に努める。	B	【評価の理由】 ・4月の時間外勤務時間から20%削減することを目標にして取り組んできたが、年間平均すると削減率は18.3%であった。 【成果】 ・年度当初や学期の終わりなどの業務が立て込む時期以外には、各自のライフスタイルに合わせて決まった時間に帰宅しようとする意識が高まってきている。 【課題】 ・業務を勤務時間内に効率よく行うことができる者と長い時間をかけなければならないものとが明確に分かれており、特定の者が1年間を通して時間外勤務が長くなっている。定時退勤日を設定しているものの、必ず守らなければならないとの意識はないものが多い。	・授業に使う教材や成績処理の資料などのデータ化を進め、サーバーにライブラリを作成し誰もが利用できるような整備することで業務の効率化を図っていきたい。
		○服務規律の保持	・教職員の綱紀粛正と服務規律の保持に努め、不祥事案の発生0件を目指す。	・定期的に「運転チェックカード」「意識向上カード」により、自己を振り返り交通事故発生を防止する。 ・コンプライアンス徹底に関する研修を行うとともに、教職員が相互に声を掛け合い意識を高め合う雰囲気醸成に努める。	A	【評価の理由】 ・教職員による交通事故をはじめとする不祥事案は発生していない。 【成果】 ・昨年度から引き続き教職員の加害・被害事故及び服務規律違反等発生していない。 【課題】 ・不祥事案は発生していないが、危機管理意識は管理職ほど高くない。常に危機意識を持ち続けるための手立てが必要である。	・服務規律の保持について、職員が互いに声を掛け合い事故や不祥事案を発生させない職場の雰囲気の醸成を図る。
	○教職員の資質向上	○指導力の向上	・全教科で「西部型授業」を実践し、言語活動を設定することを通して活用力が高まったと自覚する児童を85%以上にする。	・月に2回以上の校内研究会を開催し、全員1回は研究授業を行う。その際、学年グループ及び全体での指導案検討会及び模擬授業を行い、授業の質の向上を目指す。 ・講師招聘による授業研究会を開催し、指導力を高める。 ・中学校と連携し10年間で育む学力について、全職員が共通理解の下研究に取り組むことができるような体制作りを行う。	B	【評価の理由】 ・児童の評価3.7、保護者の評価3.3、教職員の評価3.0であった。児童、保護者ともに92%が、わかりやすい授業作りのための工夫・改善に取り組んでいると評価している。 【成果】 ・教職員は算数教科指導法の研究に熱心に取り組んでいる。模擬授業でよりよい授業作りのために討議を重ね研究授業に望んでいる。また、研究の中で提案されたことを共通理解し、全職員で取り組んでいる。この雰囲気も醸成されている。 【課題】 ・算数科の授業において西部型の授業が確実に実施されるようになってきているが、活用力を意識した授業づくりが十分にできているとは言えない。	・全教職員が共通理解の下、活用力向上を意識した指導を行っていく。
	○危機管理	○学校管理下の安全点検及び安全指導	・学校管理下における児童の事故報告0件を継続する。	・校内及び校区内の危険な場所について、現地を確認しながら指導を行う。 ・各種危機に臨機応変に対応するために、交通安全教室、地震避難訓練、火災避難訓練、不審者対応避難訓練などの実践的な場を設定し、児童の危険予知力を育てる。 ・校区内の安全点検、通学路安全点検などを学期に2回は行い、「安全マップ」「危機管理マニュアル」を見直す。 ・校内の安全点検を確実に実施し、不具合がある場合は速やかに対処する。	A	【評価の理由】 ・幸いこれまで、児童の事故報告0件で推移している。児童の評価3.8で、内容96%の児童が教職員より事故予防の指導を受けているとの認識をもっている。また、保護者からの評価もほぼ100%の結果となっている。 【成果】 ・日頃の登校時の安全指導や長期休業前の指導で、事故防止について継続的な指導を行ってきたことで、大きな事故も無く過ごすことができた。 ・各担任が朝の会や帰りの会、さらに緊急に連絡しなければならないことについてその都度、安全に関して具体的な事例を示したり、現場に児童を引率したりして具体的に指導を行ってきた。月初めの安全点検はもろろのこと、機会あるごとに管理職と事務室により校内巡視をし点検を行ってきた。集団下校の際に、地区担当職員が下校指導を行うとともに危険箇所の点検を行った。 【課題】 ・日常生活の中にも、少しの油断で大きな事故につながることを意識させながら学校生活を過ごさせるよう、常に安全に意識をもたせる必要がある。事故は常に発生するものとの危機管理意識を高め、より安全・安心な学校づくりを行っていかねばならない。	・日常的な安全指導や児童自身が安全意識を高めることとともに、校内の安全点検、地区内の危険箇所の把握、登校時の安全な歩行の指導を行い、更なる事故の発生防止に努める。
○食物アレルギー等への対応		・食物アレルギーが原因となる事故発生0件を継続するとともに、学校での食物アレルギーへの対応についての情報発信を行う。	・児童個々の食物アレルギーについて正確に把握するとともに、教職員間で確実な情報の共有を行う。 ・アレルギー調査回収を確実にし、それぞれの児童に関するアレルギー情報を集約し、必要に応じて、家庭へのおたよりを配布する。 ・アレルギー対応が必要な児童に関しての保護者チェック済み献立表を掲示し、誰がどのクラスの給食指導に行っても事故を起こさないよう周知を図る。 ・食物アレルギーに対応して献立作りが行われていることがわかる献立表の作成・配布を実施する。	A	【評価の理由】 ・今年度もアレルギーによる事故発生0件である。栄養教諭および養護教諭を中心に情報の伝達・確認が行われてきていることにより未然に防がれている。 【成果】 ・栄養教諭が毎月食物アレルギーを引き起こす可能性のある食材をチェックし担任に知らせるとともに、職員室に掲示することで誰が指導に入っても同じ対応をすることができた。 【課題】 ・現在、激しいショックを引き起こす対象児はいないが、成長に伴う体質の変化により変化していくこともあることから、突然の発生も視野に入れ、常に危機感をもって全職員が対応を周知しておくことが必要である。	・年度当初にアレルギー対象児の共通理解を図るとともに、対象児それぞれの対応についてのリストを作成し各教室に配備する。	
教育活動	●学力の向上	○基礎・基本の定着	・学習した内容について標準検査問題において通過率85%以上を目指す。 ・自校作成「漢字検定テスト」「計算検定テスト」の定着率90%を目指す。	・日々の学習指導において漢字活用の状況を把握し適宜指導を行うとともに習熟・定着を図る家庭学習に取り組ませる。 ・4年生以上の教室に辞書を常設し、すぐに活用する習慣付けを行う。 ・基礎基本の習得とそれを活用した思考力・判断力・表現力などを高めるための授業の在り方について研修を深め、授業実践に生かす。 ・学年グループ及び全体での指導案検討会、模擬授業、講師招聘による授業研究会を行い、授業の質の向上を目指す。	C	【評価の理由】 ・2学期に行った漢字検定の合格率99%であった。しかし、12月に行った学習状況調査で、4～6年生の内4年生の算数科・理科が県平均を上回ったものの5・6年生の算数科は低調であった。 【成果】 ・各学級担任、基礎・基本の定着のため授業の質の向上を目指し校内研究に熱心に取り組んでいる。また、学習したことを確実に定着させるために昼休みや放課後の時間を使って個別指導や補修指導に取り組んでいる。漢字検定に向けて、練習問題等を共有したり、練習のさせ方の情報交換を行ったりしながら、確実な定着を図る取組ができていた。 ・基礎的・基本的な内容の定着は図られてきているが、全国・県学習状況調査に見られる活用力に関する内容についてまだまだ十分な能力を育むことができていない。	・授業の効率化を図り、1単位時間に練習問題に取り組む時間や学習内容を振り返り定着を図る時間を確保する。 ・市漢字検定について、漢字検定週間にとどまらず、日頃から漢字学習の徹底を行う。
		○いじめの問題への対応	○「いじめ」をなくす風土づくり	・いじめ認知0件を目指す。	・毎週月曜日の職員朝会を生活指導の情報交換会と位置付け、児童の生活や気になる子の様子に関する情報を共有し、全職員で足並みをそろえた指導を行う。 ・具体的目標と手立てを明確にした学級経営案を作成し実践する。また、学期末には実践を振り返り、次学期に向けて計画を見直す。 ・スクールカウンセラーによる児童理解に関する職員研修会を行う。 ・全学級が道徳の授業を公開する授業参観日(ふれあい道徳)を設定する。 ・一人一人を大切に、個性を生かした学級づくりを行う。 ・道徳の時間を要した全教育活動の中で感性を育む体験活動を実施し、いじめを生み出さない人間関係づくりを行う。 ・授業において互いに認め合い高め合う学習活動を設定することを通してよりよい人間関係を構築する。 ・「くらしのアンケート」の実施。	B	【評価の理由】 ・残念ながら今年度1件いじめを認知することとなった。しかし、児童一人一人を大事にする教育の実践により92%の児童が楽しく学校生活を送っていると回答している。保護者からも、いじめのない学校づくりに対して高い評価を受けている。 【成果】 ・毎月「くらしのアンケート」を実施し、児童の心の状況を把握し、いじめの芽を早期に摘み取るよう心がけた。様々な場面で縦割り活動やふれあい活動を数多く取り入れたため、同学年だけでなく異学年での交流が進み、仲よく過ごす姿が見られた。また、縦のつながりを意図的に仕組むことで互いに思いやる心の醸成が図られてきている。 【課題】 ・いじめにつながる言動や行動、トラブルの学級にも見られる。その多く言葉によるコミュニケーションが十分でないことが原因である。互いに意思疎通を図る手段を身に付けさせるとともに相手を受け入れる寛容な態度の育成を図っていかねばならない。
	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	○授業におけるICT機器の積極的な活用	・毎日1単位時間以上、授業参観において1回以上タブレット端末、電子黒板等の機器を活用した授業を実施する。	・ICT機器を活用した授業を行うことを見通した指導計画を立案する。 ・保護者授業参観等で、ICTを活用した授業を公開する。 ・ICT機器の利活用及びスマイル動画及びデジタル教科書の効果的な利用方法に関する研修を適宜行う。 ・県教委や教育センター主催の研修会などへの積極的な参加を促し、教師のICT活用技術を向上させる。	A	【評価の理由】 ・児童の92%がICT機器を活用してわかりやすい授業を教職員が行っていると評価している。保護者も授業参観を通して機器利用の様子を確認しているようである。90%近い方々が評価されている。教職員の評価は3.2と昨年度よりも0.4ポイント低くなっているが、日常の機器利用頻度は高い。 【成果】 ・電子黒板が学級に1台配備されるとともにタブレットも貸与されている。各教科の特性や内容に応じて、使用頻度は変化するが、使用頻度の増加に伴い、教職員の機器利用に関する技量も高まってきている。 【課題】 ・機器の利活用のために、ハードウェアは整備されつつもソフトウェアの整備は十分でない。作成する時間も十分に取れる状況でない。	・個々が作成したり利用したソフトウェアや教材をデータベース化し、誰もが利活用できる環境づくりを行う。
	○特別支援教育	○特別支援教育の推進	・特別支援教育のねらいや意義、本校での方針や取組について認識している保護者を90%以上にする。	・校内委員会や特別支援教育に関する研修会を実施することで教職員の資質向上を図る。 ・PTA総会や各種集會等で説明を行うとともに、学校長からの「学校だより」により特別支援教育の取組を紹介し、保護者へ啓発を行う。 ・巡回相談・通級教室、専門機関等に関する情報を保護者へ紹介し、利用を進めるとともに、SCやSSW及び養護教諭、教育相談担当者と連携しながら特別支援教育の効果や必要性を啓発していく。	C	【評価の理由】 ・教職員の評価2.9であった。特別支援教育について、個人情報を含め大変デリケートな問題を含んでいるため、すべての情報を開示して知らせることができない。そのため、保護者へ伝える内容も一般的なことについてのみとなり、学校の実態に即した情報の伝達となっておらず、保護者の評価2.7にとどまっている。 【成果】 ・学級をとり出してしまいう子や学習に集中できない子の保護者に根気強く特別支援教育の意義や子どもの困り感について説明を続けてきたため、来年度の入級につなげることができた。 【課題】 ・特別支援教育への誤った理解や偏見がまだまだ保護者にあるため、それらの解消を目指した啓発活動を行い、一人でも多くの児童が自分に合った教育を受けられるよう環境を整えていかねばならない。	・PTA総会をはじめとして保護者が来校される機会に特別支援教育の目的と効果、そしてその必要性について啓発活動を行っていく。

② 地域と共に伸び行く学校づくりの推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	○開かれた学校づくりの推進	・本校の教育目標及び教育活動がどのように行われているのかを認識している保護者を90%以上に引き上げる。 ・低学年150冊、中学年120冊、高学年100冊の読破100%を目指す。	・学級通信や学校だよりを通して学校教育目標や学校行事、学習の様子を知らせる。 ・学校HP(各種ブログ)で行事予定や活動の記録などを公開する。 ・地域の方々へは区長会や婦人会、民生児童委員会等の会合で説明を行う。	A	【評価の理由】 ・92%の保護者が学校の様子が「よく伝わっている」「概ね伝わっている」と評価している。評価指標の90%を達成することができた。 【成果】 ・ 学校長による学校だよりや各担任から毎週発行される学級通信、さらに、教頭、栄養教諭、学校図書事務、学力向上コーディネーターから等様々なお知らせを通じて学校や児童の様子を伝えることができた。 【課題】 ・ 学校の取組や児童の状況に無関心な保護者も見られ、いかに学校や子どもに目を向けてもらえるようにするのが大きな課題である。	・ 学校側が情報の発信に自己満足するのではなく、保護者のニーズにも対応した情報発信を行っている。
教育活動	●学力の向上	○授業と家庭学習とのつながり	・家庭学習実施率100%を目指す。	・帰宅後の時間の使い方を意識させる「タイムマネジメント」を発達段階に応じて取り入れ、有効な時間の使い方を身に付けさせる。 ・学級通信や家庭訪問及び懇話会等を利用して、家庭学習の取り組み状況を知らせるとともに、実態に応じて保護者の関わり方について啓発を行う。 ・生活アンケートを前後期に実施し、アンケート結果を発信して、よりよい家庭環境や学習習慣確立に向けての啓発を行う。 ・毎月2日をノーテレビ、ノーゲームデー・ノースマホデーとし、保護者に協力の呼びかけを行い、家庭学習や読書を勧める。 ・「武雄市おすすめの本」の読書を勧める。	C	【評価の理由】 ・ 家庭学習に関する児童の評価3.6、回答の内訳をみると約70%の児童は確実に家庭学習に取り組んでいるが、27%の児童が確実でない。さらに、3%の児童家庭学習の習慣が身につけていないと回答している。 ・ 読書に関して児童の評価が3.2、保護者3.5であった。児童の80%が達成している。 【成果】 ・ タイムマネジメントを取り入れた指導が全学年で取り組まれており、計画に沿った家庭生活を実施することができる児童も増加しつつある。 ・ ノーテレビ、ノーゲームの実施率90%を上回るようになった。見たい番組を録画するという対処の仕方にも身に付いている。また、家族がテレビを見ていると別の部屋へ移動し過ごすこともできている。 【課題】 ・ タイムマネジメントを取り入れ、やらなければならないことを確実にやり遂げる実践力の向上が課題である。	・ タイムマネジメントを取り入れた生活カードにより家庭学習習慣の形成を確実にする。 ・ 道徳教育を核として、やらなければならないことを確実にやり遂げようとする実践力の育成を図る。
	●心の教育	○あいさつ運動の推進	・家族、友達、地域の方々より先にあいさつを実践している児童を80%以上に引き上げる。	・スローガン「なかよし学校日本一」の実現の第一歩があいさつを互いに交わすことであることを児童に周知徹底させる。 ・道徳の授業や学級活動を通してあいさつは互いのコミュニケーションの幅を広げるきっかけになることを実感させ実践力を高める。 ・校門でのあいさつ運動への自主的参加者を称賛することにより他児の自発性を促していく。	B	【評価の理由】 ・ 児童の評価3.3、保護者の評価3.3で同じであった。また、教職員は3.0であった。児童の88%が人より先にあいさつをすることができていると答えており、評価指標の80%を超えることができた。 【成果】 ・ 学校内でのあいさつは積極的に行われている。また、通学途中に見守っていた地域の方々へも同様である。 【課題】 ・ 学校への来校者や見守りをされている方以外の地域の方へのあいさつはまだ積極的にできるとは言えない。	・ あいさつ名人レベル表を意識した指導を行うとともに、自らレベルアップして行こうとする意識の醸成を各学級で実践する。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	○情報モラルの指導	・情報モラルを理解し、ICT機器の適切な活用の方法を身に付けさせるための指導を学期に1回以上実施し、家庭への啓発も同時に行う。	・児童や保護者へのアンケートを実施し、携帯電話、携帯ゲーム機、インターネット環境などについての実態を把握する。 ・ICT活用技術向上及び情報モラルに関する職員及び保護者の研修会を開催し、インターネット活用上の留意点やその指導法に関する理解を深め、懇話会や教育講演会、さらにはお便りを通して保護者へも啓発する。 ・インターネットのマイナスの部分やSNSの適切な活用の仕方について指導する。	C	【評価の理由】 ・ 児童と保護者の評価3.5と3.2であったが、教職員2.3と低い結果となった。子どもを取り巻くネット環境は日進月歩で大人が追いつくことができない状況になってきている。発達段階に応じた系統的な指導計画がなく、指導が十分に行われていない。 【成果】 ・ 育友会総会、懇話会や学校からの通信によりインターネットやSNSの危険性や安全な利用について保護者への啓発を行った。また、全校児童を対象に情報モラルに関する指導を集会において行った。 【課題】 ・ これまでのインターネットに関する指導だけでなく、SNSに関連した情報モラルの指導へと指導内容が幅広くなってきているため、教職員自身が十分に把握できていないことが増えてきている。教職員の具体的な実践研修が必要である。	・ インターネットの利用だけでなくSNSの利用、チャットさらには著作権等の多岐にわたる内容を学年に応じて系統立てた指導計画を作成し指導する。
	●いじめの問題への対応	○教育相談の充実	・児童一人ひとりの心の状況を把握し、登校への不安をもつ児童を減少させる。	・「教育相談週間」を設定し、アンケートを実施することにより、児童の悩みを十分把握できるようにする。 ・日頃から児童の様子を観察し、いつでも、何でも話せる環境作りを促すとともに、気になる児童については適宜面談を行う。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと十分に連絡や連携を取り、保護者への相談活動を充実させる。	B	【評価の理由】 ・ 91%の児童が、困ったことがあると教職員に対してもらっていると回答している。保護者からは、83%であった。昨年度10%の児童が対応してもらっていないと回答していたが、今年度は4.4%に減少した。また、現在数名が不登校傾向状況にある。 【成果】 ・ 教育相談週間の面談により、日ごろの不安や悩み、友達関係について感じていることをとらえることにより、児童の状況を把握し教育相談担当や管理職と担任が状況を共有することができた。登校を渋る児童がいるが、教育相談担当を中心にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携しながら管理職も保護者との面談を行うことで対応してきた。毎週職員連絡会で気になる子の報告を行い全職員に共通理解を図ってきた。 【課題】 ・ 10%弱の児童が更なる対応を求めていることから、「困り感」を見せない児童の存在をも意識した学級経営・学校経営を進めていかなければならない。	・ 自分から困り感を伝えることができない児童を見逃さないよう教育相談週間や面談週間を設定する。
	●健康・体づくり	○食育の充実	・学校での給食残食0を目指すとともに、家庭でも偏りなく食べることができるように食生活改善に関する啓発を家庭へも行う。	・発達段階に応じてバランスよく食べることの大切さを指導する。 ・「食育だより」を計画的に発行し、食に関する意識を高めるとともに栄養素について詳しく知らせ、食べ物についての知識を発信する。 ・学校からの様々な通信を使って、保護者へ食の大切さを啓発するとともに、食習慣改善の協力を依頼する。 ・食に関する指導を、給食の時間に行う。	B	【評価の理由】 ・ 児童94%が残さず食べていると回答している。給食担当の栄養教諭による調査でもほとんど残菜は見られないということであった。年度当初から継続して指導を行ってきた成果である。 【成果】 ・ 各担任の給食指導により、食の大切さ、バランスよく食べることの必要性などについて啓発を行った。そのため、給食に関わる方の苦勞を実感し、残さず食べようという思いをもつに至った。また、栄養教諭が各学級を巡回し講話をしたり、授業を行うことで、食の大切さを実感させることができた。児童の意識も高まってきている。 【課題】 ・ 個々の摂取量に差があり、必要量に満たない児童がいる。年間を通して摂取量を増やしていくことが必要である。また、学級間の指導に若干の違いが見られたため、全職員の共通理解が必要である。	・ 年度当初に個々の摂取量を把握し、期間ごとの目標量を設定し、児童が目標達成の実感を伴う指導を行う。
		○健康的な生活習慣の確立	・基本的な生活習慣を身に付けている児童を90%以上に引き上げる。	・早寝、早起き、朝ごはんを励行することができるよう各学級で指導に当たる。 ・病気の予防や健康増進に関する保健指導を季節の変化に応じて実施する。	B	【評価の理由】 ・ 早寝・早起き・朝ごはんを毎日きちんと取り組むことができていた児童は83%であった。また、保護者の評価でもできていた児童は70%程度にとどまっていた。 【成果】 ・ 全体的な実施率は8割程度であったが、5年生の朝食喫食率は90%を超えている。朝食だけに関しては、他学年も高い喫食率となっている。 【課題】 ・ スマートフォンをはじめとするモバイル機器の浸透により、オンラインゲームや動画サイトの視聴により夜間の活動時間が長時間に及んでいる児童が増加してきている。	・ 帰宅後のタイムマネジメントについて月に一度一週間分の記録を取り自分の生活を振り返らせるなど、具体的に問題点を明確にし改善させる指導を行うことが重要である。
	○幼保小中連携	○幼保小連携の推進	・幼保園保育士との交流を図るとともに、入学してくる子ども達への理解を深める。	・幼・保・小の合同会議を実施する。 ・幼・保・小の子ども達のふれあい活動と職員の授業(保育)参観を実施する。 ・生活科や総合的な学習の時間、及び学校行事等に園児を招待し児童との交流を図る。	B	【評価の理由】 ・ 教職員の評価2.8であった。新入児についての情報交換が全教職員で対応しているものの年に1度だけであること。などから、全職員が連携できていると実感する場を作ることができていないことが反映されている。 【成果】 ・ 運動会での新入児の競技参加、新入学説明会での保育園児と1年生との交流、新入学児童に関する情報交換などを実施することができている。また、年度当初と年度末に保育士との連絡協議会を開催することができている。 【課題】 ・ 園児との交流の機会年間を通して設定してあるが、保育士との交流の機会がほとんどない。	・ 小学校の授業参観開催をお知らせし、保育士の参観を依頼すると共に児童の情報交換を行い交流を深める。
	○小中連携の推進	・北方中学校区の学力および活用力向上を目指した授業交流を行う。	・学校運営協議会を合同で行い、児童・生徒の情報を共有する。 ・小・中共通した学習活動を設定し、活用力の向上を目指した授業づくりを行う。 ・新中学1年生に関する情報提供を積極的にを行い、小学校卒業と中学校入学の段差を小さくする。	B	【評価の理由】 ・ 教職員の評価3.0であった。小中合同実践交流会を開催し、年間を通して教職員相互の交流の機会をもつことができた。しかし、中学校区の問題である学力向上についての取組視点が明確になっていないとはいえなかった。 【成果】 ・ 今年度より児童生徒の活用力向上研究指定事業により、学習習慣や家庭学習について、発達段階に応じ9年間継続した指導の在り方について共通理解を図り取り組むことができた。 【課題】 ・ 北方中学校区の活用力向上を目標に実践を行ってきた。小・中間で共通した取組を行うようになってきているが、まだまだ十分に取り組みを実践に反映させることができていない。校内研と運動させながら取り組んでいくことが必要である。	・ 授業による学力向上という視点に立った実践交流会を実施する。	

#### 4 本年度のまとめ・次年度の取組

【まとめ】  
・ アンケートによる評価の平均値(4点満点)、保護者3.2、児童3.5、教職員2.9であった。概ね本校の教育活動が好意的に受け入れられていると考える。保護者の評価、教職員の評価は児童ほど高くなかった。昨年度、評価指標を数値化したことにより、児童の様子や自己の指導を振り返ったとき厳しい評価になっていたが今年度も同様であった。特に教職員の自己評価は昨年以上に低い結果となった。  
・ 教職員は、各種学習状況に関する調査の結果から明らかとなった、基礎的・基本的学力の低さと活用力の低さを十分に理解しており、校内研究を通して課題解決を図ろうと取り組んできた。研究授業前の模擬授業には、職員が参加し自分が授業を行うかのように多様な案を出し合い熱心に討議を行い、指導力の向上に努めてきた。また、家庭学習の取組ませ方、算数科指導法、道徳科や人権・同和教育指導の充実など多岐にわたる研修会を行い資質向上に努めてきた。  
・ 種々の学校行事に、保護者だけでなく地域の方にも広く呼びかけ来校いただけるよう配慮してきた。学校長の学校だより、各学級のお便り、学校HP、学校情報メールでの連絡等多様な手立てで情報発信を行ってきた。  
・ 児童が安全・安心に学校生活を送れるように、いじめ防止、教育相談の充実、アレルギー対応、学校内外の安全点検等の充実を図るため、教職員だけでなく保護者や地域の方々へ啓発を行うことで協力も得ることができた。校内で、各担当を中心に部会や管理職等への情報がスムーズに伝達されるよう組織的に取り組むことができていたこともあり、いじめや生活上の事故等の発生はほとんど無かった。

【次年度の取組】  
・ 家庭学習について、中学校と連携し、指導についてさらなる徹底を図る。家庭へ実態を伝え、協力依頼・啓発を今後も進めていく。さらに、家庭学習が授業につながるような内容の工夫を行うことで、「やってよかった」との実感を伴う取組みとなるよう配慮していく。  
・ ICT機器活用について、電子黒板設備が整っている。インターネット回線のスピードも改善されネット上のコンテンツを活用した授業作りが可能となった。また、情報モラルの指導について、SNSやチャット、さらに著作権等について、学年に応じて系統立てた指導計画を作成し指導するとともに、教職員の研修を充実させ資質の向上を図っていく。  
・ 学力の向上を図るために、校内研究で取り組んでいる活用力の研究をさらに深め数学的思考力の育成を図る。また、個々の教職員の授業作りの共有化など、教職員が一体となって学力を積み上げていく体制作りをする。

●は共通評価項目、○は独自評価項目